

【暗唱聖句】「これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです。」第一コリント 10:11

#### 【日曜日・荒野での不満】

エジプトを脱出したイスラエルの民は、荒野をさまよう中で、食べ物の中で不満を漏らすようになっていきます。彼らは「誰か肉を食べさせてくれないものか。エジプトでは魚をただで食べていたし、きゅうりやメロン、葱や玉葱やにんにくが忘れられない。今では、わたしたちの唾は干上がり、どこを見回してもマナばかりで、何もない」（民数記 11:4～6）と言うのでした。彼らは飢えに苦しんでいたわけではありません。毎日、マナばかり食べさせられて、それに飽きてしまい、文句を言っているのです。もちろん、荒野での長旅に心も体もへとへとだったのでしょうか。ゆっくりと休めない状況の中で、精神的な余裕も無くなり、食べ物に不満の矛先が行ってしまうということはよくあることです。私たちも注意しなければなりません。

しかし、マナに対する不満は、神様の導きに対して不満を口に出しているのと同じでした。モーセもこの民の不満のために影響を受け、「あなたは、なぜ、僕を苦しめられるのですか。なぜわたしはあなたの恵みを得ることなく、この民すべてを重荷として負わされねばならないのですか」（民数記 11:11）と言います。このような民の不満に神様はどのように答えられたのでしょうか。食べきれないほどのうずらが与えられるのです。しかし、同時に激しい疫病が襲ったのでした。彼らの反逆的欲求は満たされたけれども、そのために苦しまなければならなくなりました。彼らは、食べたいだけ食べたけれども、彼らの不節制は直ちに罰せられたのです。神様が与えて下さるもので満足することが、健康の秘訣なのです。

#### 【月曜日・不満—この伝染しやすい悪】

荒野での不満は、マナに関することだけではありませんでした。何とモーセの兄姉であったアロンとミリアムがモーセに文句を言い始めたのです。まず彼らは、「ミリアムとアロンは、モーセがクシュの女性を妻にしていることで彼を非難し、「モーセはクシュの女を妻にしている」（民数記 12:1）と言います。そして、それにも関わらず、モーセばかりを主が用いられるので、「主はモーセを通してのみ語られるというのか。我々を通して語られるのではないか」（民数記 12:2）と続けました。この二人の訴えを、主は聞いておられました。そして、すぐにそれに答えられました。

民数記 12:6～8 「主はこう言われた。「聞け、わたしの言葉を。あなたたちの間に預言者がいれば、主なるわたしは幻によって自らを示し、夢によって彼に語る。わたしの僕モーセはそうではない。彼はわたしの家の者すべてに信頼されている。口から口へ、わたしは彼と語り合う。あらわに、謎によらずに。主の姿を彼は仰ぎ見る。あなたたちは何故、畏れもせず、わたしの僕モーセを非難するのか。」

モーセを選んだのは主なる神様です。それなのに二人はモーセに文句を言っています。「モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった」（民数記 12:3）とあるように、その言葉を黙って聞いていたのでしょうか。すると、神様は割って入るように語られたのでありました。神様は、その人が預言者であれば直接ではなく幻や夢で語りますが、モーセには直接語ると言われました。モーセは預言者以上であるということです。イスラエルの民をエジプトから脱出させるための指導者としてモーセを選ばれたのは神様であり、王室で 40 年、羊飼いとして 40 年養い導かれ、ついにエジプトを脱出してここまで来たのです。しかも、イスラエルの人々から信頼もされています。その神様の選びに対して畏れもせず、非難するのかと神様はアロンとミリアムに言われました。そして、ミリアムは重い皮膚病にかかって 7 日間隔離されることになったのでした。アロンは何もなかったことから、アロンよりもミリアムが先導してモーセを非難したのかもしれない。また大祭司としての働きができなくなってしまうことに対する配慮があったのかもしれない。アロンはすぐに自分たちの非を認めて、赦しをこい、ミリアムの皮膚病を癒して下さるように懇願します。モーセも主にミリアムの癒しを求めますが、癒されるまで 7 日間癒されることはありませんでした。彼ら

には、反省する時間が必要でした。私たちも主に用いられている人をうらやんだりしないで、自分が導かれるところで主に奉仕することが大切です。

#### 【火曜日・不満は反逆を引き起こす】

主は、各部族から一人ずつ代表を選び、カナンの地を偵察に行かせます。そこは肥沃な素晴らしい土地でした。そこにはイスラエルよりも強い人たちが住んでいましたが、エジプトの巨大な軍隊さえイスラエルには手を出せなかったことを考えれば大丈夫。ヨシュアとカレブは進んでいきましょうと進言します。ところが、他の 10 人の斥候たちは、どう考えても勝てるはずがないと反対しました。共同体たちは、負の情報により強く影響を受け、夜通し泣き言を言いました。そして、「エジプトに帰ろう」とさえ言う始末です。モーセとアロンはひれ伏して思いとどまるように言い、ヨシュアとカレブは衣を裂いて、「もし、我々が主の御心に適うなら、主は我々をあゝの土地に導き入れ、あゝの乳と蜜の流れる土地を与えてくださるであろう。ただ、主に背いてはならない。あなたたちは、その住民を恐れてはならない。彼らは我々の餌食にすぎない。彼らを守るものは離れ去り、主が我々と共におられる。彼らを恐れてはならない」と励まします（民数記 14:8、9）。しかし、民たちは、二人を石で撃ち殺せと気が狂ったように叫ぶのでした。

不安や不満は伝染し、信仰を弱めます。さらに自分たちの信仰を弱めるだけでなく、信仰者に対して敵意を現わすようにさえなります。だから、私たちは不信仰な言葉を語らないように注意しなければなりません。むしろ、ヨシュアとカレブのような信仰の言葉を語るべきです。

#### 【水曜日・仲保者】

カナンから偵察隊が帰ってきた後、不安と不満が噴出する中で、主はモーセに現れ、「この民は、いつまでわたしを侮めるのか。彼らの間で行ったすべてのしるしを無視し、いつまでわたしを信じないのか。わたしは、疫病で彼らを撃ち、彼らを捨て、あなたを彼らよりも強大な国民としよう」（民数記 14:11、12）。民の不信仰から来る不安と不満の声は、神様を侮ることに他なりません。これまで目の前で見てきた数々の驚くべきしるしを無視し、信じようとしなない民を、神様はあきれ果て、彼らを疫病で捨てて、モーセからもう一度より強い新たな国民を立ち上げようと提案されます。しかし、モーセは「どうか、あなたの大きな慈しみのゆえに、また、エジプトからここに至るまで、この民を赦してこられたように、この民の罪を赦してください」（民数記 14:19）と懇願するのです。このとりなしは、まさにイエス様が私たち一人ひとりの罪を執り成して下さっているのと同じです。モーセがこのように自分たちのために執り成してくれたことを、多くの人は気づきもしなかったことでしょう。イエス様は、今もなお天でとりなしてくださっています。この祈りはきかれ、民は赦されます。ただし、不信仰に陥った者たちは、誰一人カナンの地を踏むことはできないとも言われました。これは罰というよりも神様の憐みです。信仰がなければカナンの地を占領することはできないからです。

#### 【木曜日・信仰対憶測】

イスラエルの民は荒野で 40 年もの間、旅を続けました。荒野は安住の地ではありません。彼らは、1 日も早くカナンの地に入りたかったことでしょう。同じように私たちもいま天のカナンに向かって旅を続けています。天のカナンはまだ遠いのでしょうか。一体いつ入ることができるのでしょうか。わかることは、1 日 1 日と近づいているということだけです。また民たちは不信仰のゆえに、その世代は誰もカナンに入ることができないと言われました。ところが、モーセを通して主が語られた言葉を聞いて後悔し、自分たちは間違っていた、今からカナンに上っていこうと言う者が現れたのです。モーセは、「主があなたたちのうちにおられないのだから、上って行ってはいけません。敵に打ち破られてはならない」（民数記 14:42）と引き止めるのですが、いうことをきかず、攻め上ってやられてしまいます。なぜ、彼らは主の言うことを聞かないで、自分の判断で行動するのでしょうか。これを反面教師とするために、聖書はこのような出来事も記録されているのです。最後に、民たちは、最初から信仰を持ってカナンの地に入れば、早く休息を得ることができたことでしょう。主に聞き従うことなしに、真の休みは得られないことを覚えたいと思います。